連載

チャレンジする Someone NEWS ～挑戦者の履歴書

第⑫回

佐藤 彌右衛門 氏（会津電力株式会社特別顧問、会津エナジー株式会社社長）

――会津と福島の資源と暮らしを取り戻す

一般社団法人 洸楓座　代表理事 佐藤 建吉

笑顔で篤く語る佐藤彌右衛門氏

▼出会いは「鐵の道」

今回、紹介する佐藤彌右衛門氏との関わりは10年以上前からになる。筆者の洸楓座では、2008年8月から2年間、国交省の「新たな公」によるコミュニティ創生支援モデル事業を行った。具体的には、「房総横断鉄道沿線のエコミュージアム環境整備」として、千葉県のいすみ鉄道&小湊鉄道の沿線活性化事業である。その事業の2年目に、いすみ鉄道の起点でもあるいすみ市の大原駅、の近くにある木戸泉酒造から『鐵の道』という銘柄の清酒が商品化された。これが現在までに、11の酒蔵から発売された『鐵の道』の元祖となった。『鐵の道』は、全国のローカル鉄道とその沿線の酒蔵のコラボの活性化商品である。【註1】

その第2号は1年後、大阪の水間鉄道の関西佳子社長が、筆者の勤務先の千葉大学に来られ、地元の井坂酒造場とのコラボを深めるために『鐵の道』が欲しいと。その後、筆者が大阪に出向き、その商品化が2011年5月に実現した。この年、2011年3月11日には、東日本大震災が起きた。寸断された三陸鉄道を、『鐵の道』で応援するため現地に出向いた。三陸鉄道は、2012年4月1日に一部再開したが、これに合わせ久慈市の酒蔵の福来から、「三陸鉄道北リアス線応援酒」として『鐵の道』が発売された。その再開セレモニーには、筆者も参加した。

その後、2012年8月末には、秩父鉄道から3号&4号の『鐵の道』が発売された。前述のように、『鐵の道』は、全国の9つのローカル鉄道の沿線の11酒造から商品化された。この商品化の展開活動において、会津の喜多方の酒蔵・大和川酒造の第9代当主の佐藤彌右衛門氏との出会いがあった。

▼高磁場の喜多方&北方風土館

筆者が初めて喜多方を訪ねたのは、2009年ごろであると思う。「鐵の道」の関係で、2009年11月14日に、千葉県大多喜町で日本エコミュージアム研究会の面々の参加を頂き「エコミュージアムシンポジウム」を行った。その準備のために、エコミュージアムでは、先駆的で有名な山形県朝日村の安藤竜二氏を訪ねた。故郷の山形県鶴岡市への帰省の途中であった。その帰路に喜多方も訪ねた。

そのシンポジウム後、大震災の前年に改めて大和川酒造を訪問し彌右衛門氏と初めて面会した。北方風土館を案内して頂いたが、『鐵の道』の商品化の話は、折り合いが付かなかった。その後、何度か喜多方に行ったが必ず寄るのが、北方風土館である。「近代化産業遺産」に認定されており、往時の威風画然を感じる。喜多方には味噌&醤油の老舗商家のほか、誰もが知る蔵のラーメンなど、磁場が強い。また歴史と文化がある。ある日、骨董品のお店に立ち寄ったら見たことのある顔が働いていた。千葉大で教えた卒業生が棲み付いていた。世間は狭いし、愛着が沸く。

▼会津の、酒蔵のオヤジの使命

洸楓座では、2012年6月に、東京で「鉄の道フォーラム」を開催した。彌右衛門氏にも講演を依頼した。会場は日本交通協会で、明治31年11月に帝国鉄道協会として創始された歴史があり、鉄道のイベントには相応しい。講演は、①水間鉄道の関西社長には「ローカル鉄道の意義～水間鉄道の取組みから～」、②佐藤彌右衛門氏には、「伝統としての日本酒とその魅力」、また③秩父農工科学高校書道教師の関根武氏には、書道部生徒に「秩父鉄道応援酒『鐵の道』のラベル題字の揮毫指導と制作」を依頼した。

そのプレゼンにおいて、彌右衛門氏は、東日本大震災での東京電力福島第一原子力発電所事故による福島県が受けた被害、さらに会津のエネルギー資源が東京に盗奪されてきたことに抗するために、会津に電力会社を創ろうとしている等、その意気込みについて主に篤く話された。酒造りについては、自身は、いわゆる「地酒」は、「郷酒（さとざけ）」という文字を使っており、素材&原料はすべて故郷&会津産で醸しているとだけ語った。

福島や会津の置かれた状況、その資源と立地を生かすことに立ち向かわねばならないとの思いを語られた。会津のオヤジの心意気と事業家としての取捨&集中を教えてくれた。

▼会津の資源を守る

彌右衛門氏は、風光明媚な喜多方の水と米に感謝し誇りとしている。同氏の大和川酒造では、自社の農業法人「大和川ファーム」の農園（50㌶）と市内の契約農家が、化学肥料を使わないで山田錦ほか酒造好適米を栽培し原料米として、また飯豊連峰の伏流水を仕込み水として酒造りを行った9代目、彌右衛門は新たな道を造り、大地を守るために叶うエンジンを自らが持つことになった。そうした時期が、前述の2012年6月のフォーラムでの講演であった。もはや酒のことよりは、資源・エネルギーのことで郷土を守るために胸中は一杯だったと思われる。後述するように、2013年夏に会津電力の事業化で実現するのであった。

同氏は、新たに地元資源を活かした太陽光発電事業もスタートさせた。筆者も自然エネルギーを進める活動をしているが、彌右衛門氏の活動の成果は頼もしい。流石に会津の〝郷士〟である。弥右衛門氏は、1951年3月31日の誕生日。Facebookでの「いいね！」や「コメント」にあるように、70歳。パワーは十分である。もはや燃料切れのないエンジンを、身体に積み替えているようだ。進路選択としてのハンドルの切り替え、加減速のためのシフトチェンジやアクセルの加減は必要であるが、後退することはない。

筆者が、本人からお聞きしたことによれば、9代目としての、「佐藤彌右衛門」への実名の変更は法務手続きも厄介で極めて大きな、人生のシフトチェンジであったという。当時は、酒造業としての事業の目標があったはずである。しかし、それをすっかり変えたのは、原発のメルトダウンにから守るべき郷地の惨状と荒廃を目の前にして、進むべき道、そして創るべき道を造ることにした。こうして、1790年創業以来せっかく変世代に、この手でやらなければならない。いまこそ、日本のモデルをつくろう…。」

この思いが参加した識者や同志に伝わり、同年の11月には、大規模な「ふくしま会議」が開催された。同時に、この動きを後押しし、未体験の構想が事業化に結び付いたのは、福島の惨状からの福島の自立的復興に共感した中央の人々の協力があってであった。それは、相補関係のチカラを生み出してもくれた。環境エネルギー政策研究所の飯田哲也氏や北海道グリーンファンドの鈴木亨氏の協力が大きい。結果、地元の市町村、銀行・信金・信組、企業、個人が株主となって2013年8月1日に、会津電力株式会社を立ち上がった。彌右衛門氏が社長に就任した。

▼原発の犠牲を排し「福島」を取り戻す

弥右衛門氏は、福島の自立を考えた。その端緒にするべく、同氏は北方風土館でのシンポジウムを企画した。ゲストとして、当時、福島県立博物館館長だった赤坂憲雄氏や、地元の編集者・遠藤由美子氏、さらに福島出身の企業経営者・山田純氏ら、多くの参加者を迎えて、2011年5月に実施した。彌右衛門氏は、そこで自身の思いを語った。

「…会津には、水も太陽も、風も地熱も、バイオマスもある。自然エネルギーの資源がある。それが、これまでは東京電力や東北電力や電源開発に持って行かれている。その資源を自分たちの手で電気にし、自分たちで使い、余った分は売ることにしたい…。」

「…地産地消として、この計画は、いま、この時期に、会津から日本のモデルをつくらなければならない。それは、子や孫のために、自分たちの6㍍の風力発電所が運開する予定である。

〝共有的〟株式会社としての地域法人は、その後、飯館電力株式会社（40超カ所）としても拡大している。こうして、会津から始まった自然エネルギー利用の機運は、福島県ほかに広まっている。

▼会津の歴史&文化を守る

彌右衛門氏の構想は、さらに広がる。それは、これまで述べたエネルギーとある面では重なり、会津についての愛着である。それはまた、9代当主の立場にも重なる。9代は8代から、8代は7代から。8代は9代のために、9代は10代のためにある。すなわち、持続性である。国連の言葉では、SDGs、「持続可能な開発目標」である。それには、誰もが異論はないはずである。

が、国家は地方を踏み台にしてはならない。東京は会津から搾取してはならない。彌右衛門氏は会津をモデルとして福島を守ろうとした。そして、それは地方が元気を持てる日本としてのモデルとなると構想した。それには、会津の歴史や文化を守り誇りとすることが必要である。

その気付きとなるメッセージが、「汝の足もとを深く掘れ、そこに泉あり」である。これは、彌右衛門氏が副会長を務め、前出の赤坂憲雄氏が館長を務める「北方風土館」が発している。奥会津のミュージアム構想である。いわゆる会津地域を丸ごとミュージアム（博物館&美術館）に見立てた地域のモノ、コト、トキ、ヒトが主役の「エコミュージアム」である。福島県立博物館館長でもあった赤坂氏に主導して頂き、芸術、工芸、音楽、産業、地理、民俗学、歴史文化、さらに資源エネルギーなどの発信の一拠点として認知されればと構想している。

▼日本のモデルづくりに

佐藤彌右衛門氏の想いは、会津とどまらない。先導的な会津電力の取り組みは、確実に、日本の各地に伝播している。その事業者たちが参加して「全国ご当地エネルギー協会」を2014年5月に設立した。同氏は現在、名誉会長として活動している。

氏は同年2014年には、ドイツのシェーナウ環境賞「電力革命児」を受賞した。その賞金を原資として、2016年2月に脱原発の自然調和・持続・循環型社会モデルをつくるためのアーカイブ事業として、記録や展示を行っている。

また、福島市では、同志として脱原発を進める下村満子氏が主催するシンポジウムを開催している。筆者も2017年の「生き方塾」には参加した。【註2】

本年2021年3月11日は、東日本大震災の10年目にあたる。当日、「原発ゼロ・自然エネルギー推進連盟」（原自連）が主催するイベントで、副会長を務める彌右衛門氏は、「福島から再エネ100㌫の未来を創る」のセッションにおいて、自身の活動の動機と思いを若い世代に語り、また当事者として行動して欲しいと語った。

筆者は2年前に、都会に住む高齢者に子や孫を考え「未来思考のシルバー・デモクラシー」を身に着けて頂くため、新橋まちなか大学院において、彌右衛門氏による講座を行った。【註3】

結論として、私たちは、全ての世代が、未来思考で持続可能な真のデモクラシーを獲得しなければならない。地方のエネルギーの自立政策により、持続可能な日本を創ることができる。

【註1】「地域資源のローカル鉄道と地酒で、地域活性化―ローカル鉄道応援酒『鐵の道』」、第83号11面（2017年7月24日（月）発行）
http://www.kofuza.jp/images/nen_2018_36.pdf

【註2】「元総理・小泉純一郎氏の勇気と正義の自己省察―『我悔いる、ゆえに我あり』」、第74号10面（2017年3月20日（月）発行）
http://www.kofuza.jp/images/nen_2018_36.pdf

【註3】「新橋まちなか大学院は、SDGsなり―未来のためのシルバー・デモクラシー」、第137号11面（2019年8月5日（月）発行）
http://www.kofuza.jp/images/nen_2019_14.pdf